



2

【ひろばの風】

新設！健康スポーツ学科
～元気ある社会の構築を目指して～
人間健康福祉学部 丸山 裕司



3

【Campus News】

2014年(平成26年)4月に健康スポーツ学科を新設
「オープンキャンパス」「ボランティア
ウィーク」「ほけっとまつり」を同時開催
松山まつり「野球拳おどり」で南海放送
賞を受賞・チャリティゲーム大会を開催
多目的グラウンドを新設

4

【Campus News】

剣道女子が強化拠点大学として愛媛国体(平成29
年開催)の運動部活動強化・育成指定校に指定

国際福祉論 フィリピン研修

【クラブ紹介】

学友会剣道部

部長 健康スポーツマネジメント専攻4年 山畑 佳代さん



5

【ESSAY】

藻屑のように —
でも、ときには根を張って
人間健康福祉学部 寺尾 寿芳



カタリナ ひろば

Vol.26 No.1
2013.11

聖カタリナ大学
聖カタリナ大学短期大学部
www.catherine.ac.jp



6

【ゼミナールインタビュー】

人間健康福祉学部
森平 准次 ゼミ



7

【ようこそ就職課へ】

～夏休みだより～
就職課長 廣嶋 守

8

【教員著書紹介】

『ケアと人間』

西平 直 編
寺尾 寿芳

(聖カタリナ大学教授 執筆担当部分：第11章「生者と
死者の交わり—現代日本のカトリック霊性」)
：ミネルヴァ書房、2013年



8

【教員著書紹介】

『オルテガ・イ・ガセットにおける人生論』

ホビノ・サンミゲル
(聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部学長・教授)
：創風社、2013年



新設！健康スポーツ学科 ～元気ある社会の構築を目指して～

人間健康福祉学部 丸山 裕司

平成25年9月8日早朝、2020年のオリンピック開催地が東京に決定し、当日は全国津々浦々からその喜びと興奮が報道等で伝わってきました。さて、日本オリンピック委員会の『スポーツ宣言日本～二十一世紀におけるスポーツの使命～』の冒頭に、「スポーツは、自発的な運動の楽しみを基調とする人類共通の文化である。スポーツのこの文化的特性が十分に尊重されるとき、個人的にも社会的にもその豊かな意義と価値を望むことができる。とりわけ、現代社会におけるスポーツは、暮らしの中の楽しみとして、青少年の教育として、人々の交流を促し健康を維持増進するものとして、更には生きがいとして、多くの人々に親しまれている。スポーツは、幸福を追求し健康で文化的な生活を営む上で不可欠なものとなったのである。」と謳われています。

時を同じくして今年6月に、新学科設置の届出が文部科学省に受理され、四国の私立4年制大学において健康スポーツ系の学科としては初めてとなる「健康スポーツ学科」が来春4月、誕生することになりました。新学科は、現行の健康福祉マネジメント学科健康スポーツマネジメント専攻の教育資源を基盤として、より高度な健康教育を目指し、また教育内容を充実させた学科となります。健康スポーツ学科は、社会の中で健康・スポーツが担う役割の教育、研究を行い健康社会の実現に貢献できる若者を養成します。本学科の特色は、「社会学」の分野を基礎学問として、健康と社会の関係について多面的に追求する授業内容で編成し、「健康スポーツ学」の分野では、幼児から高齢者までの幅広い年代の人々の健康をスポーツの実践を通じてサポートする能力を培う内容を学ぶことにあります。

具体的なカリキュラムは、社会学の基礎的内容を学ぶ「学科基礎科目」の他に展開科目として「健康スポーツ系科目」と「健康社会系科目」で構成し、「健康スポーツ系科目」では、体力、運動時のからだの反応といったスポーツの基礎知識を身につけたうえで、運動指導方法を中心に学びます。一方、「健康社会系科目」では、社会における健康の意義やスポーツの在り方などについて学びます。また、社会調査の知識や技術を学習し、調査の専門家であ

る社会調査士を取得する授業構成にもなっています。

健康増進施設、学校体育、障害者スポーツなどにおける運動指導は、対象者の身体的機能にアプローチするものであり、解剖学や運動生理学などの知識や対人コミュニケーションの図り方といった技能を兼ね備えていくだけでなく、対象者へ手本になるような運動技能も習得することになっています。

学内に設置するヘルスプロモーションセンター「サルレーテ」は、最新のトレーニング器具を多数備えており、この「サルレーテ」を利用して、授業で習得した知識をもとに実際の健康指導について学習することになります。また、屋外スポーツの学習のため、多目的グラウンドも新設し、これらの充実した施設環境のもとで、実践を通した学びを深めることができるものと思っています。

東京オリンピックは2度目の開催となります。1度目は1964年で、戦後、アジアで開催された初めての近代オリンピックです。「世界に追いつけ、追い越せ」と競っていた時代を背景とした、高度経済成長の象徴でもありました。しかし、当時若かった日本も現在は、超高齢社会となりました。今回の2度目のオリンピック開催を機に高齢者のスポーツや余暇スポーツといった健康増進のためのスポーツをさらに広げ、心身とも豊かで成熟度の高い国家でありたいという願いがこめられていると思われます。新学科の学生は、将来、運動型健康増進施設職員、福祉施設（運動指導者・介護予防指導者）、一般企業（健康増進産業、健康機器産業、各種販売業）などの分野での活躍が期待されます。このため、健康スポーツ学科では、社会の機能や構造と健康との関係について幅広く学習できる環境を整え、かつ心身の健康の維持・増進に貢献できる人材育成のための支援体制の準備に着手しています。

東京オリンピック開催決定と時を同じくして、新学科の歴史が始まることに胸をふくらませます。7年後のオリンピックとパラリンピックではアスリート達の磨き抜かれた力と技に感動する場面が目に見えますが、来春からそれに負けないくらいの情熱を傾け、現代社会に生きる人々を健康に導くことができる多くの優秀な学生を育てていきたいと考えています。

2014年(平成26年)4月に 健康スポーツ学科を新設



2014年(平成26年)4月に新設する「健康スポーツ学科」について、7月3日(水)に県庁内で記者発表を行いました。

健康スポーツ学科では、社会学、健康スポーツ学の学習を通じて、健康的な社会づくりに貢献できる人材を養成します。

学科の基礎学問である社会学の分野では、健康と社会の関係について多面的に追求する教授内容を中心とし、「健康スポーツ学」の分野では、幼児から高齢者までの幅広い年代の人々の健康をスポーツを通じてサポートする能力を培う内容を学びます。

「オープンキャンパス」「ボランティアウィーク」 「ぼけっとまつり」を同時開催



7月13日(土)に「オープンキャンパス」「第11回ボランティアウィーク公開イベント」「ぼけっとまつり」を同時開催しました。

今年度、初めて3つのイベントをコラボレーションして開催し、多くの方々にご参加いただきました。

オープンキャンパスでは、大学・短大の学科別説明、高齢者疑似体験、模擬授業、個別相談などを、ボランティアウィーク公開イベントでは、福祉施設や学生によるチャリティバザーやフリーマーケット、北条高校吹奏楽部・興居島太鼓クラブによるチャリティコンサート、聖カタリナ女子高校(手話・コーラス)、各サークルによる発表など、楽しいイベントが多数行われました。

そして「ぼけっとまつり」では、遊びのコーナー(うちわ製作・ヨーヨーつり等)やエアトランポリン等の親子で楽し

めるイベントが開催され、多くの親子連れで賑わい楽しい一日となりました。

ご来場いただきました皆様を始め募金活動にご協力いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

当日、各ブースの募金箱等へいただいた募金及び収益金は、国内外の福祉団体・非営利組織等に寄附させていただきました。

松山まつり「野球拳おどり」で南海放送賞を 受賞・チャリティゲーム大会を開催



聖カタリナ大学ダンス部連が松山まつり「野球拳おどり」で、優秀賞の『南海放送賞』を受賞しました。

8月10日の松山まつり「野球拳おどり」では、聖カタリナ大学ダンス部連が笑顔で楽しく、元気に、はつらつと踊りました。

汗びっしょりの学生の顔には、みんなで一体となってやりきった充実感がありました。

皆様のご声援、ありがとうございます。

また、松山まつりをより楽しんでいただくため、聖カタリナ大学としてブースを出店し、チャリティゲーム大会を開催し、親子連れの方を始め多くの方に楽しんでいただきました。

ご来場いただき募金にご協力いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

当日、募金箱へいただいた募金は、松山市社会福祉協議会のみごころ銀行に寄附させていただきました。



多目的グラウンドを新設

2014年(平成26年)4月に新設する「健康スポーツ学科」の開設にあわせて、多目的グラウンドを新設しました。主に授業やサッカー部等のクラブ活動で使用する予定です。



剣道女子が強化拠点大学として愛媛国体(平成29年開催)の運動部活動強化・育成指定校に指定



昨年度に引き続き、平成29年に開催される愛媛国体の運動部強化・育成指定校(強化拠点大学)に指定され、ホビノ・サンミゲル学長より剣道部代表者へ指定証の授与を行いました。

これは、愛媛国体開催時に出場する選手の、積極的かつ効果的な育成強化を図るとともに「愛媛県手づくり選手の育成強化」の実現と愛媛県スポーツの飛躍的な発展を期することを目的としています。

国際福祉論 フィリピン研修

9月11日(水)～9月19日(木)の9日間、学生9名と教員2名がフィリピン研修に行ってきました。研修の前半は、フィリピンの首都マニラ市にある聖トマス大学と提携して社会開発に関する合同授業を行い、フィールドワークとしてターラック地方のアエタ族コミュニティを訪問し、参加型開発シミュレーションを行いました。研修後半は、日本人が主体的に関わっているNGOや社会起業を訪問し、ストリートチルドレンや貧困に苦しむ女性の支援を体験的に学びました。



CATHERINE

クラブ紹介

学友会剣道部



聖カタリナ大学学友会剣道部は、男子13名女子14名で月曜日から土曜日に2時間程度の稽古をしており、学生主体で稽古に励んでいます。

女子は昨年度までに14年連続全日本女子学生剣道優勝大会に出場しており、男子は全日本学生剣道選手権大会に2年連続出場し、四国インカレで2年連続準優勝をしています。男子・女子の部員全員が切磋琢磨しながら日々精進しています。

また、聖カタリナ大学学友会剣道部(女子)が、平成29年度に開催される愛媛国体の運動部強化・育成指定校に認定されました。このように愛媛県から認定されたのも、今まで



先輩方が築いてきた伝統や結果が認められたからであると思います。我々剣道部員は日頃の皆様のご協力に大変感謝しています。

多くの剣道部員はスポーツ推薦入試で入学し、聖カタリナ大学で勉強・部活に頑張っています。スポーツ特待制度もあり、大学からの援助を受けながら剣道を続けることができます。高校生の皆さんも一緒に稽古に励み、全国大会出場を目指しませんか。

剣道・勉強、共にやる気のある高校生の入部を心待ちにしています。

部長 健康スポーツマネジメント専攻4年 山畑 佳代

藻屑のように—— でも、ときには根を張って

人間健康福祉学部 寺尾 寿芳



はじめまして。4月に本学に着任した寺尾寿芳と申します。よろしくお願ひいたします。「流れ者」です。藻屑のように。子供のころから父親の仕事の関係で転居に転校を繰り返してきたのですが、大人になってからも、転居どころか転職もまた大好きで、気の向くままに生きてきました。そんな私でも「北海道、九州、いや海外もありえるけど、四国だけはないな」と思っておりましたところ、奇しくも伊予の浜辺に漂着し、聖カタリナ大学の教壇に立つことになりました。不思議なことですが経験上、みずから積極的に行動した場合よりも、ある意味想定外の潮流に運ばれた、いや恵まれた場合のほうが結果的に良かったという思いがあります。今回もきっとそうでしょう。

大学ではキリスト教や哲学などの科目を担当しておりますが、専攻はと問われれば、「神学・宗教学・人間学」と答えています。専攻が三つもあるのか、と驚かれるかたもいるでしょうが、これには理由があります。キリスト教では神と人のあいだには鋭い緊張があるのですが（だからこそ和解による愛も豊かなのですが）、その両者に配慮しつつ（これが神学と人間学）、架橋する宗教学という学問が神や人の理解において不可欠だというのが、私の立場です。これは広い視野をもたらしてくれるという点では長所なのですが、視点が揺らぎがちだという点では欠点です。でも顧みれば、神は人間を超越しており、その神を是認する以上、人間のわざとしての学問がゆらめくのも仕方ないか、という諦めがあります。

神学研究者としての私は、神への信仰をいかに東洋の、より正確には日本の哲学で表現するかに関心があります。神学は神の証明というよりはむしろ説明です。その際の用具として伝統的に哲学を活用してきたわけですが、実際はアリストテレスやプラトンの発想に強く影響された、いわゆる「西洋哲学」が圧倒的な地位を占めていました。しかし最近では東洋

の、ことに日本の哲学が注目を集めています。西田幾多郎や田邊元といった我が国を代表する哲学者の思索が、いま神理解においてきわめて重要な新展開を提供しつつあります。わたしもそうした新しい試みに賛同する一人として模索しています。しかし、偉大な哲学者が目白押しで、浅学菲才の小生は怒涛のような思惟の潮に流され、漂っております。

宗教学研究としては、キリスト教と仏教との対話が主たる関心事です。上記の神学が理念的な性格を強く持つのに対して、宗教学ではむしろその宗教を信じる人たちが出会ったとき、なにか起こるのかという現象面に注目します。とくにともに世界を代表する伝統的宗教であるキリスト教と仏教は、科学技術に過剰に依拠した物質文明の現代的展開を目の当たりにして、宗教がもつ良質な面をいかに維持し、あらためて主張するのかという点で協働して対処しようとしています。そのためにもまずはお互いに理解しあうことが大切。というわけで、世界で行われている宗教間対話をフォローし、その意義を一層深めていくことに私も貢献したいと願っています。しかし、この現象の内実はじつに多種多様で、また試行錯誤の繰り返しです。膨大な情報量を処理するには、私のキャパは小さく、あつぷあつぷしているのが実情です。

人間学研究者として……って、そもそも「人間学」で何でしょうか。じつは人間に関する学びは、哲学、倫理学、人類学、さらには法学に工学等々、あらゆる学問が関係します。その結果、あまりにも細分化されて、人間とは何かという全体像がいつしかあいまいになりました。この惨状を克服するため、境界線を越えて、自由に考察しようというのが人間学の試みです。たとえば、「こころ」や「いのち」への配慮があります。ここでは一目でわかるように、漢語やカタカナではなく、ひらがなの和語の次元が開けています。そこまで立ち戻って、人間を理解しなおそうとする。これは一つの事例にすぎませんが、人間学の特徴を端的に表現していると思います。なかでも情緒的といわれる日本人の「かなしみ」という発想。そこに惹かれます。人はもとより神を理解するにあたって、こうした近しい発想から考え直さないと、キリスト教ならキリスト教の最も良い面が伝わらないような気がします。しかし、かなしいかな、トシのせいか最近めっきり涙もろくなった私は、思索するにつれ、かなしみの浪間に沈みます。そして椅子からずり落ち、ふとんのなかへと早々に潜り込むのであります。

ともあれ、松山は北条の波打ち際に打ち上げられた海草のように、ゆらゆら、ふらふらしながら思いを巡らす日々恵まれました。幸いなるかな。穏やかな瀬戸内にもいつか大波が来て、この藻屑はいずれどこかへ流れ去っていくかもしれませんが、いまはともかくこの地に根を張ろうとがんばってみるつもりです。みなさん、どうぞよろしくお願ひいたします。





ゼミのテーマを教えてください。

このゼミでは、さまざまな心の問題や心理療法をテーマにしています。前期にゼミ生の皆さんが取り上げたテーマとしては、うつ病や認知行動療法、子どもの心の問題と心理療法、など多くありました。

心の問題と言っても児童虐待や不登校のように、起こっている現象から問題を見ていこうとするのか、うつ病のような病理として見るのかで視点が異なります。しかし、どのような視点から問題を扱ってもらってもかまいません。私の専門は深層心理学ですが、これにとらわれることなく心の援助にかかわる内容でしたら扱います。このように、心の相談援助を求めるような問題やそれについての心理学的な援助であれば、テーマになります。

ゼミの特徴を教えてください。

基本的には、学生の皆さんの主体性を尊重して自由な雰囲気の中で進めていきたいと考えています。しかし自由にできるのは、ゼミ生の皆さんが自主的にゼミに取り組んでくれるという前提があるからです。皆さんは私の出した課題にそれぞれ一生懸命に取り組もうとしてくれているので、私もあまり口出ししないで済んでいます。皆さん個性豊かでそれぞれが独自の持ち味を持っています。発表については忙しさのあまり準備不足を感じさせることもありますが、真面目に取り組んでくれています。発表のテーマも非常に個性的で、教員としてもやりがいがあります。また、討議でも、個性的な意見や質問が出てとても興味深く思います。基本的に優しい学生さんばかりなので、批判的な意見が出ることもあってもやわらかい雰囲気です。

ゼミのスタイルを教えてください。

ゼミ生には、書籍の中の一章や論文などの文献を読んでもらい、それについて発表してもらい、それをゼミ全体で議論します。

発表者は自分の興味のあることからテーマを決め、それに関する文献を読み、レジュメを作成し、発表します。その際、ロールプレイやワークを取り入れてもらって体験学習をしてもかまいません。その後、全員で質疑応答やディスカッションを行います。前期は一回のゼミで二人の発表を行っています。前期の最後には、精神疾患と心理療法について、それぞれ一度ずつシンポジウム形式で複数の話題提供をもらい、それについて議論をしました。いずれにせよ、学生の皆さん一人一人が自分の興味のあることを調べ、自由に発表することを前提としています。



森平ゼミでは、心理療法を主なテーマとし、文献を用いてテーマの学習理解を深めることができるゼミです。

ゼミ生のテーマ発表の際は、先生も一緒にテーマに対して考えてくれるので、やりがいを感じることができます。

また、先生が出す課題の量には毎回圧倒されますが、無事終えたときの喜びはひとしおで、達成感を感じます。

人間社会学科3年 大森 貴浩

森平准次ゼミは
こんなゼミ

私たちの森平ゼミには男子9名、女子1名の計10名が所属しています。

心理学の研究をしており、ゼミ生が各々で興味のある心理学関係の療法や病気について調べ、定期的にプレゼンテーションを行っています。統合失調症やうつ病など、現在、社会的に問題になっている心の病については、特に興味を持っているゼミ生もおり、プレゼンテーションを通して知識をゼミ生全員で共有しています。

心理学について楽しく学ぶにはとても適しているゼミだと思います。

人間社会学科3年 得居 義裕

～夏休みだより～

夏休みで学生の出入りも少なくなつてはおりますが、それでも以前に比べると、毎日履歴書を仕上げに来る者、応募書類提出用書類を取りに来る者等出入りがあり、思いのほか忙しい毎日を送っています。就職戦線も後半に入り学生も夏休み返上で会社訪問をしている者、きちんと夏休みを取っている者いろいろですが、本年8月末現在の就職状況は非常に好調に推移しています。昨年度は最終就職率が大学96.3%、短期大学部は95.0%とともに高い数値を残すことができましたが、今年度はさらに更新する動きで推移しており最終結果に大いに期待が持てそうです。

今年度前半戦の就職戦線の特徴として以下の3つがあげられます。

第一に、アベノミクス効果か、景況も良くなり、大学に直接送られてくる求人件数は8月末現在大学において昨年比118%、短大においては130%であり、学生は多くの求人の中から数多く選択できる状況であり、その結果8月末の内定獲得者数は大学では昨年同期比1.7倍、短大においては昨年同期比2倍と非常に高い数字で推移しています。

第二に、昨年までは1～2名の採用をいただいた企業先が本年度は4～5名と大量の内定を出されているのが目立っております。こうした企業先はこの時期にも継続して採用活動が続けられるところが多く、現在の未内定者にはグッドニュースであり、学生には求人情報が出ていることの周知を徹底しており、一人でも内定者の増加を目指して就職課一丸となって支援しています。

第三は、本年度は本学においても重複内定者が例年の2倍も出てきたことであります。このようなことは今までになかったことであり、景況の回復を印象付けるものと考えています。しかしこのような状況下、今年度は残念ながら内定辞退者も増加してきており、企業先に迷惑がかからないように複数内定先を保持して就職活動はしないこと、内定先の中で自分が一番行きたい就職先を持って動くこと、10月1日の正式内定日以降の就職活動については特に注意すること等学生に伝えていきます。

このように好調に推移している今年度の就職活動であります。が、まだ多くの就職未定者が残っています。ただ未定者のうち専門職希望の学生が60%おり、彼らの就職活動は始まったばかりですから今後の就職内定には期待が持てます。

昨年度の10月後半から始めた就職未内定者への個別連絡が功を奏したことから、今年度はさらに3カ月早く、夏休みに入つてすぐに開始しました。なかなか1度では連絡が付かない学生も多いですが、まだ一度も就職試験を受けたことがない学生もあり、早くから個別連絡を取り始めたことが正解であったと考えております。今後はこの個別連絡が全員に通じ、来年の卒業式では全員が内定を持って迎えらるよう就職課全員でフォローアップしていきたいと考えております。

就職課長 廣嶋 守



『ケアと人間』

西平 直 編

寺尾 寿芳(聖カタリナ大学教授 執筆担当部分:第11章「生者と死者の交わり——現代日本のカトリック霊性」)

:ミネルヴァ書房、2013年

近年、ケアに関する話題をよく耳にします。「人間・健康・福祉」を専門的に学ぶことができる本学にとっても、非常に身近なテーマです。いうまでもなくこの言葉はもともと英語(care)で、「世話をする」という意味があります。「世話になる」ことを恥じらう日本人気質はいまでも観察できますが、カタカナで表記されることで、良い意味で感情的な印象が薄れ、いまでは医療や福祉の領域において重要なキーワードとなりました。本書はこの大きな流れに棹差しながらも、あえて「ケアと云わないケア」という新しい実験的な次元を模索しています。その最終章で、筆者は現代日本のカトリック教会の片隅で実践されている「カトリック内観瞑想」という、ユニークな活動を紹介しました。それは日本の浄土真宗に発する心理療法をカトリックの瞑想に応用した試みです。そして拙稿は、この活動に関わる本格的な研究として、おそらく最初のものだと思います。基本的な概要を述べるとともに、カウンセリングの理論にも配慮したうえで、現状・可能性・問題点を描写しました。人間が多様である以上、ケアの形態も多様であってしかるべきでしょう。ケアの広がりやを認識するためにも、有益な書物になっていると確信します。よろしければご一読ください。ご批判をお待ちしております。



『オルテガ・イ・ガセットにおける人生論』

ホビノ・サンミゲル(聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部学長・教授)

:創風社、2013年

本書は5章で成り立っている。第1章「過去から投影された人間」では、最初の人間の生は自然の中であって、内部の発達によって理性的な存在に変化していくことについて取り扱う。第2章「存在の概念と人間の生のプロジェクト」では、人間の生は根源的であり、自伝的、歴史的で文化的なものであることについて論ずる。第3章「自我と生のプロジェクトの構成」では、人間は生を自己と環境に出会いながら自分自身で作っていかねばならない。人生のプロジェクトを実現するために、生の所為、作業、使命、可能性の選択について探求する。第4章「生のプロジェクトの選択の特徴」では、人間の生のプログラムを想像力、信念、経験、運命と未来に向かって自己の決定に基づいて人生のプログラムを選択する必要があるについて論究する。第5章「人間の生の充実性」では、人間の生のプロジェクトが成功するために真正性の使命、戯曲的な戦い、英雄的な行為と時の高さに生きなければならない点について述べる。本書はオルテガの人生の哲学の観点から人生のプロジェクトについて取り扱い、一人ひとりの人生を実現させ、また豊かな人生を送るための図書となるであろう。



学校法人 聖カタリナ学園

聖カタリナ大学

カタリナひろば vol.26 No.1

編集・発行

広報委員会

〒799-2496 愛媛県松山市北条660番地

TEL (089) 993-0702 (代)

kouhou@catherine.ac.jp